はじめて、かみにひきまはすべし、ひだをすみのはしらのもとごとに、むかひざまにとるぎあり、又うへにおほひたる五の〻かたびらのはしにあて〻、むかひざまにかたひだにとるぎあり、この定にとるには、すみのひだはあるまじ、又すみにとらばこのひだあるまじ、いづれにてもありなん、

〔類聚雜要抄四〕面額。五丈八尺帳料五丈四尺九尺帳料帷面同具絹用之

○按ズルニ、此ニ面額トアルハ、斗帳ノ帽額ヲ謂フナリ、

〔儀式三〕踐祚大嘗祭儀

前祭一日、○中略各裝飾豐樂院御座、塗漆斗帳一基、方一丈四尺五寸、一棄白綾覆、上白地摸摺爲帷表、白絹爲裏、同色爲帽額、深蘇芳板押羅爲緒、懸斗帳、料鏡二面、徑一尺一寸御床子一脚、長八尺、廣五尺、高一尺二寸、以藍染綾爲覆、長一丈四尺、五幅、淺黃遠山綾爲垂帷、

斗帳裝置

〔儀式六〕元日御豐樂院儀

前一日、內匠寮官人率雜工等、構立御斗帳於豐樂殿高御座上、

〔延喜式十七內匠〕凡五月五日節、前一日武德殿構立斗帳又軟障臺二基、立御座壇以南西二間、其神泉苑立斗帳亦同、但軟障十基、御帳東西各五基

〔北山抄五〕大嘗會事

辰日裝束、天慶、巳日御插頭臺、尙立云々、兩國、豐樂殿東西第三間構壇、繼高座壇、悠紀有東階、主基有西階、東修理職、西木工寮作之、其上立御帳、卷三面帷、承平、又令卷乾艮二角云々、而天慶例如之、前後懸犀角鏡等、

〔雅亮裝束抄一〕もやひさしのてうどたつる事

おなじきまのもやに御帳あり、きさきの宮などのには、はまゆかあり、たかさ二尺ばかり、よつにしてさしあはせてをく、黑ぬり、かなものをうちたり、そのうへにさしみてたるうげん二帖を北南に玄く、みなみをまくらとするなり、このたゝみをつちしきといふ、そのうへに四のすみ〻〻